

私のなかの満州

——義勇隊訓練所と戦跡——

梶山盛夫

私のなかの満州

——義勇隊訓練所と戦跡——

梶山盛夫

著者略歴

- 明治39年8月10日 広島県呉市仁芳に生まれる
(学歴) 大正13年3月 旧制広島県立恵海中学校卒業
昭和2年3月 旧制松山高等学校卒業
昭和6年3月 東京帝大医学部卒業
昭和12年12月 医学博士
(職歴) 昭和6年4月 東京帝大病院呉内科副手
昭和16年8月 同上 退職
昭和16年9月1日 日立航空機立川工場
昭和21年7月31日 同上 退職
昭和21年10月1日 開業、現在に至る
(軍歴) 昭和9年 陸軍三等軍医(軍医少尉)〈幹
部候補生出身〉
昭和13年 陸軍軍医中尉
昭和12年7月31日 応召・第五師団(広島)
衛生隊付軍医として野戦勤務(万里長城、
太原攻略、徐州会戦)
昭和13年11月 留守第五師団軍医部部員
昭和15年10月3日 召集解除
(現在) 東京都立北多摩看護専門学校講師

(著書) 前線包帯所(昭和16年、三省堂)

私のなかの満州

——義勇隊訓練所と戦跡——

定価 1200円

昭和58年3月10日 発行

著者 梶山盛夫
発行者 梶山盛夫
現住所 〒189 東京都東大和市南街1-31-1
TEL 0425-61-0561

制作 主婦の友出版サービスセンター
〒101 東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL 東京(03)294-1111

印刷・製本 星野精版印刷株式会社

はじめに

私は昭和十五年（一九四〇）の冬、東大医学部の学生と共に、北満の義勇隊訓練所を視察した。顧みれば華北での戦争体験が私を満州に向かわせ、義勇隊訓練所の視察は私を航空機工場へ送った。

昭和二十年八月の日本の敗戦で、軍隊も義勇隊訓練所も航空機工場も終焉を迎えた。終焉は連綿と続くはずのものを一挙に消し去り、生死を共にし真剣に生きた人たちを散り散りにする魔力を持ち、その二字には万感（ばんかん）が込められていることを発見した。

あれから三十七年経過した。その間にいろいろなことがあった。最もたまらない気持ちにされたのは、昨年テレビで放映された中国残留孤児の肉親探しであった。孤児は、かつて私が訪れた北満の義勇隊訓練所の幹部職員やその後開拓団入りした元訓練生の子女に思えてならなかった。

孤児の声は、それが中国語であるだけに一層強く、日本の敗戦の後遺症をせつせつと訴えているようであった。年を重ね、経験を積み、人生のことを深く考えているつもりだが、

中国残留孤児のことを思い浮かべた迂濶さを詫びる気持ちでいっぱいである。

私は渡満当時の詳細な記録を持っている。改めて目を通し、海を渡って遠く満州の地へ住みついた訓練生や、精魂を傾けて訓練生の指導に当たった幹部の姿を懐かしく思い出している。私の体験した訓練所の生活を私なりに再現して、後の世に残しておこうと思った。それが私の義務でもあるように思う。

昭和五十八年一月

著者

目 次

はじめに.....	1
(一) 内原訓練所.....	7
(1) 日輪兵舎 (2) 渡満壮行式	
(二) 満州と大陸衛研——軍歌で思う満州——.....	11
(三) 渡満と月山丸——船に酔う——.....	13
(四) 大陸の汽車——里帰りをすませた人たち——.....	16
(五) ハルピンの印象.....	19
(1) 中央医院 (2) キタイスカヤ	
(六) 国境の町、黒河——満州とソ連の境のあの黒竜江——.....	23
(七) 大額訓練所.....	27
(1) 国境地帯の訓練生 (2) 看護婦 (3) 寮母	
(4) 幹部の家族 (5) 冬の表情 (6) 迎春花	

(Ⅶ) 孫呉訓練所……………	49
----------------	----

- (1) 座談会 (2) 天地根元時代 (3) 総務部長

- (4) 訓練所の病院 (5) 訓練所の医師 (6) 中隊

- (7) 中隊長と幹部 (8) 訓練所長 (9) 大晦日と正月

- (10) 満人部落

(Ⅷ) 尾山訓練所——汽車におくれて北安に一泊——……………	98
--------------------------------	----

(Ⅸ) 再び黒河へ……………	104
----------------	-----

- (1) 北黒線の食堂車 (2) 領事館 (3) 満人の結婚式

- (4) 興亜塾の神聖の間 (5) 黒竜江沿岸の日本人興亡史

- (6) 国境の地よ、さようなら

(Ⅹ) 車中で砂金やオロチョンの話を聞く……………	119
---------------------------	-----

(Ⅺ) 再びハルピンへ……………	122
------------------	-----

- (1) 中央医院 (2) ハルピン訓練所

- (3) ハルピン観光（露人墓地など）

(4) ハルビンよもやま話	141
(㉔) 新京	141
(先輩の話を書く)	
(戦跡)	
(㉕) 奉天——同善堂と戦跡——	148
(㉖) 旅順の戦跡——二〇三高地など——	152
(㉗) アルゼンチナ丸	158
(付記) 加藤完治氏	161
あとがき	164
満州開拓民入植図	165
渡満日程表	166

(一) 内原訓練所

(1) 日輪兵舎

北満の義勇隊訓練所及び開拓団の衛生調査と巡回診療を目的とする大陸衛生研究会（大陸衛研）が、昭和十三年に東京帝大医学部に発足した。衛研の会長は坂口医学部長である。

衛研から渡満医学生の指導教官を委嘱された私は、義勇隊の予備知識を得るために宮本、足立の両指導教官と共に昭和十五年十一月三十日内原訓練所を視察した。

内原訓練所は正式の名を満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所と称し、昭和十三年三月に茨城県東茨城郡下中妻村字内原に建設された。青少年が三カ月間の学習、武道及び体育の外に、農作業の基礎訓練を受けて渡満するもので、所長は加藤完治氏である。

常磐線の内原駅に下車して小雨の中を行くと、日本国民高等学校に隣接した松林の中に円

形木造二階建の見慣れない家屋の集落があった。これが有名な内原訓練所の「日輪兵舎」といわれるものである。

訓練所の正門には、カーキ色の制服、制帽に身を固め、鍬の柄を銃のように構えた訓練生が歩哨に立っていた。学生義勇軍衛生隊の札の掛かった日輪兵舎に案内された。兵舎は、丸太の柱に板囲い、杉皮葺きの簡素な建物で、建坪三十坪ばかりの舎屋に約六十名の訓練生を収容できるようにになっている。学生は五日間の泊まり込みで農耕に従事したり座談会に出席しているという。

満州の現地を訪れる者の心構えとして、訓練所側から次のような要望事項が示された。

- 一、一部の訓練所を見て全体を判断しないほしい。
- 二、訓練所は満州の曠野の施設であることを忘れないほしい。
- 三、施設は絶えず改善が計られていることを知ってほしい。
- 四、開拓の大事業をはぐくみ育ててほしい。

(2) 渡満壮行式

十二月一日、快晴。午前九時、三カ月間の訓練を終えた四百名の訓練生の渡満壮行式が、日輪兵舎に囲まれた弥栄^{いやさか}広場で挙行された。

ラッパ鼓隊を先頭にして、リュックを背負った訓練生が鍬の柄を銃のように担い、戦闘帽のあごひももりりしく入場してきた。ふと私は広島練兵場の出陣式を思い出した。

加藤完治所長に代わって、今井副所長は次のような簡潔な訓示をした。

一、体を大切にせよ。

二、仲よくせよ。

三、迷うな。

四、物を大切にせよ。

分列行進が終わると、渡満部隊は日満国旗、ラッパ鼓隊を先頭にして勇躍渡満の途についた。内原駅で訓練生は秩序正しく乗車した。ラッパの吹奏で訓練生は一斉に姿勢を正し、膝に手をおいて瞑目した。“み魂鎮め”である。

十一時四十五分、汽車は動きだした。出征する時のような騒々しさは見られなかった。年若い訓練生が、親元を離れて遠く満州の地へ渡るといふことは、何か不思議なもののように私には思われてならなかった。

渡満部隊は宮城参拝のあと、代々木の青年会館に一泊し、途中伊勢神宮にお参りするといふことである。

(二) 満州と大陸衛研——軍歌で思う満州——

私のなかの満州は、すでに子供の頃にできあがっていたように思う。毎年三月十日の陸軍記念日には全校児童が校庭に集まって、日露戦争の時、奉天や旅順で日本兵がロシア兵と戦った話を先生から聞いた。

子供の頃に歌った「戦友」「道は六百八十里」「雪の進軍」「敵は幾万」「橋中佐」や「広瀬中佐」「婦人従軍歌」「水師營の会見」など数々の軍歌は、未だ見ぬ満州に郷愁のようなものをかきたててくれた。

時代が下がって「満州は日本の生命線」や「日満親善」などの文字を新聞で見えるようになって、日系官吏が多く海を渡り、私の知人の何人かは新京、奉天、撫順などへ就職していった。

今回の渡満で最も気がかりなのは北満の冬の寒さである。歌の文句の「酷寒零下三十度」

が頭から離れない。昨年、指導教官として三河^{さんか}地方へ出かけた柿沼内科の西野先生をたずね、北満には雪が少なくて風がないので凌ぎよいことを聞いてやや安心した。手袋はスキー用のものが、指が四本揃っているので暖かいことを教えられた。

十二月四日、大学の三四郎池の側の集会所で、われわれ一行のために壮行会が催された。多数の教授の出席があつて盛会であつた。会長坂口教授の挨拶のあと、拓務省の宇留野技師から次のような注文が出た。

一、患者には親切にしてほしい。

二、座談会では相手をがっかりさせることのないよう、むしろ励ましてほしい。

問題の寒さについて尋ねると、寒さは馬鹿にしないで、むしろ恐れるようにしてほしいと配属将校は言い、寒い土地にはそれなりの防寒設備がある上に、満州には湿気が少ないので内地ほどには冷たくないと公衆衛生院の技師は言った。

寒さについてかなりの情報を得たが、なお不安は消えない。北満の冬の寒さを、私なりによく観察して、具体的に人に説明できるようにしてみたいと思う。

(三) 渡満と月山丸——船に酔う——

十二月十二日。約四十日間の日程で満州へ出発する日である。家族は赤飯を炊いて私の門出を祝ってくれた。召集を解除されて上京し、当時は木挽町の歌舞伎座前の知人の家に仮住まいしていた。

繁華街の朝の空気は澄んでいた。銀座四丁目から地下鉄に乗る。上野駅は乗り降りの客でごった返し、身動きができないくらいだった。医局の友人も送ってくれた。新聞社のフラッシュを浴び、渡満の抱負を聞かれた。

出発直前になって家内は二人の子供を連れてホームへ入ってきた。行っていらいしゃいませ、と言って子供は頭を下げた。家内は涙ぐんで目を伏せた。召集で三年前に阿佐ヶ谷駅を立った時の情景を思い浮かべた。

八時、汽車が動きだすと、万歳の声があがった。子供は家内に手をとられ、体を乗り出す

ようにしていつまでも手を振っていた。清水トンネル付近で、窓外に雪の積もっているのを見た。

午後二時三十分新潟駅着、気温十度で暖かい。雪の新潟を期待していたが、雪は無かった。新潟港の岸壁には乗船月山丸が横着けになっていた。記者から旅行の目的や期間などを聞かれ、ここでもフラッシュを浴びた。

乗船直後、私服の警察官から護身用のものの有無を聞かれた。出征兵が大勢乗り込んだ。国防婦人会の人たちが盛んに旗を振る。「螢の光」のレコードが流れると出征兵は合唱した。出帆を告げるドラが鳴った。月山丸は静かに埠頭を離れた。旗ははげしく振られた。私は出征の日に、これが日本の見納めかと思って甲板に立ち、次第に遠ざかる宇品港の灯を眺めた時のことを思い出した。

港を出ると間もなく船は揺れ始めた。額に冷たい汗がにじむ。横になると、いくらか楽になる。頭を少しでも持ち上げると吐き気がする。船に弱いのだ。船室は蒸し暑い。夜中にたびたび目が覚めたが、相変わらず船は揺れていた。

十二月十三日、今日も相変わらず船は揺れている。十二月から三月まではどの海も荒れる